

無常性の克服 ——『神の不变性』を読む——

山下秀智

一 無常性と我意

諸行無常ということは、我々日本人にとつても馴染みの深い言葉である。無常とは、サンスクリット語の *anitya* であり、それは永続的・固定的・不壊を意味する *nitya* (ニトヤ) に否定の接頭詞 *o* を付けて否定したものである。常に変化し流動している現実世界の姿をこのような言葉で表現している。古代ギリシャの哲人ヘラクレitusも「万物は流転する」と言つてゐることからしても、一切が常に変化しているということは、古今を問わず人間の実感として、その真理性をもつてゐると思われる。キエルケゴールは壊れやすいもの、腐りやすいもの、墮落しやすいものという表現で無常な事物を表現しているが、仏教用語に近い感覺と言えよう。

まずは、キエルケゴール自身の言葉を引用しよう。「聴衆者諸君、今君は聖句が朗誦されるのを聞いた。今その反対のこと、すなわち時間的、この世的な物事の可変性や人間達の可変性を考えることとは、何と当然なことであろう! 一切が過ぎ行くもの (Forkrænkelighed) であり、人間が、そう、聴衆者たる君も変化するものであるということとは、何と意氣消沈することであり、心身を疲労させる」とある⁽¹⁾。

キエルケゴールがその最後に記した談話は「神の不变性」と題され、そこには神の不变性、就中「愛において不变なる者」「無限の愛の内で動かされる者」である神について語られているが、その一方で強調されるのは、やはりこの世の有限性であり、無常性である。そして筆者が注目したいのは、そのような無常性が、何よりも人間の我意に根拠をもつと述べている点である。

もし君が彼のこの不变性を、彼の欲するが如く、君の福利のために、君の永遠の福利のために奉仕させるなら、又もし君が、君の我意 (Eigenraadighed) (そしてこれは可変性が外部からである以上に、ここから本来現われてくるといふものである) が死に絶えるように教育されるなら、早いほど一層よい。何も君の助けにはならない。善につぶてであろうが、惡についてであろうが、君がなさねばならないのである (*ibid.*, S. 264.)。

この前後に、キエルケゴールは人間存在の特性を「不安定」「可変性」「移り気」「我意」の四つの言葉で表現している (Ustadighed, Foranderlighed, Lune, Eigenraadighed)。そして、この特性は、仏教用語で言えば「諸行無常」の根拠であるとしているのである。それ故、無常性の克服には我意が死に絶えなければならないのである。この主觀に無常性の根拠を置き、永遠の世界に到達するには、我意が否定されねばならないとするのは、まさしく唯識思想と軌を一にする考え方であると言えよう（唯識思想と並んで、同時期に如來藏の思想も生起したが、特に「大乗起信論」が「衆生心」に大乗の法を置いていくことなど、同様な観点から注目すべきである。そこでは人間の「⁽²⁾普通の心に仏法そのものが主体化されている」。なお、我意という言葉によつて、筆者は思惑（思忖）をもつて生きる人間に必然的に随伴する自己中心性を考えている。それは単に意識レベルのみなら

す、無意識のレベルにおいても適用されるものであつて、唯識で言ふ末那識 (*manas*) に相当するものである。

かくして更に「もし君が神の不变性によつて不安定と可変性と移り氣と我意を断々とするように教育されるなら、その時君は神の不变性の中」常に一層平安にそしてますます至福に憩うのである」(*ibid.*, S. 264.) と謂われるるのである。

一一 我意の死滅は神の方から

今、「君が神の不变性によつて……我意を断念するように」教育されるなら」という一文を引用した。この表現は何気ない表現であるが、我意が人間存在の方から断念される」とにはならないといふことを表現してゐる。我意は神の不变性によつて断ち切られるところ側面を本質的にもつてゐるのである。筆者は「」に他力思想を見て取る。そして「」のような表現は、「」の書の始めから一貫している。

汝、愛において不变なる者よ、汝は我々の福利のために自らを変えしめる」とはない。

我々は我々自身の安樂を欲し得ますように、そして、汝の不变性によつて、無条件の（絶対的な）服従の中に安らぎを見出だし、汝の不变性の内で安らぐように、我々が教育されまやよへ——。 (*ibid.*, S. 255.)

「」には、我々人間の利益、福利のために神は自らを変えないと、むしろ変わるべきは人間の方であり、しかもその変化は人間の思惑（思粹）からは決して生じないとが言われている。神の

不变性にぶつかることによって、又その不变性への無条件の服従によって、人間の変化というものが起ころのである。神の方は決して変化するのではない。

「ああ、汝、無限の愛の内で汝は動かされる。そして又この我々の祈りも汝を動かして、汝がこれを祝福し、かくしてこの祈りが、祈る者をして汝の不变の意志との一致の内で変化せしめ給うよう！」(ibid.)といわれる。キエルケゴールは最初のこの祈りについて、それがいかにささやかなものであっても、神の意志と一つになるように、祈る者を変えるようにと、祈っているのである。神の意志と自らの意志が一致するという表現は、この作品において数多く見られるが、それこそキリスト者における信仰の成就といえよう。この神の意志との意志疎通を神は常に要請されているのである。

何よりもまず第一に、君は神と意志を疎通しているか、君は理解するようにまったく真剣に熟慮し、誠実に努力しているか、……そして君がそれに努力すべきであるということが（君と同様にすべての人間に關しても同様に）、神の永遠に不变な御意志なのである (ibid. S. 259.)。

無常性の克服は我意の死滅において成就するが、その我意の死滅は神の不变な意志との合致の要請を真剣に (Alvor) 受けとめるところに可能となるのである。

三 神からの促しと人間の躊躇

神（父）は完全な賜物を贈ること以外には考えない。やむには自ら来たりての賜物を受けようとするのである。

最も親切な存在者、愛そのものを考えてみよ。この存在が私を目指して賜物を選んだのであり、そして、この賜物は善きものであり完全なものである。その存在が来たって私はこの賜物を受けよう（skjenke）とする——そこに他の人間が居合わせて、彼は私は忠告して言う、君、そこで柔軟（柔軟）にしようではないか、と（*Ibid.*, S. 257.）。

不变な愛の存在が、私に向かってただただ善であり、完全である賜物を与えるとしている。しかし、人間はそのような場合に柔軟にはならず、むしろ憤怒する場合すらあるのである。

古代における一人の異教徒、ただ一人の人間、素朴な賢者が嘆いたことは、しばしば彼が次のことを経験したことである。すなわち、彼が一人の人間に一層善い知識を齎らすために、つまり彼に福利を為そうとして、彼から一、二の愚劣さを取り除こうとするが、相手が非常に怒ることがあり、この素朴な者は半ば冗談半ば真剣に言つてゐるのだが、まさしく彼に噛み付くとしたというのである（*ibid.*）。

この文における異教徒は勿論ソクラテスであるが、いつも変わらず、善き・完全なものを与えようとする者に人間は躊躇、憤怒するのである。この辺りの機微については、例えば【法華經】なども素晴らしい比喩を開拓している。それは【法華經】【信解品】に説かれている「長者窮子の比

喻」である。簡単にその内容を記すならば、幼い頃に家出した息子が、やがて成人して、しかも乞食となつて我が家とも知らず長者の家の近くを徘徊する。わが子と知った長者は勢い込んで家人に子供を追わせるが、息子は何のことか分からず、不安に駆られ、逃げ去ろうとする。そこで今度はまず一番下の雇人として雇つて、次第に重く用いて、やがて最後に実の子であることを打ち明け、全財産を与えるのである。一切の善きものを与えようとした時、子供はむしろ躊躇のであつて、そこに、特有な伝達方便が必要となるのである。絶対の真理は、相対者である人間にとっては、躊躇の対象であり、憤怒の対象である。このことについては又、「キリスト教への修練」が見事な筆致で描いていることは周知のとおりである。

救いを前にして躊躇の人が人間であるとするなら、信仰は柔軟（柔軟心）(Sagtmäßig)において成就するといえよう。キエルケゴールも繰り返しこの作品において、柔軟である」との重要性を説いている。これは仏教で言えば、生ける現実・事実をありのままに受けとめるところに成立する信心の様相に他ならない。キリスト教においても、柔和こそ神の愛の受容、或いは神の意志との合致（信仰）に欠かせないものと言えよう。

因みに基督教は「論註」の中で次のように述べている。「柔軟心」といふは、いはく、広略の止觀相順し、修行して不二の心を成せるなり」。止と觀とを均等に行じて、驕ぶることもなく沈むこともなく、諸法実相をあるがままに了知する心こそ、柔軟心であり、それは人生のまことの姿に隨順して逆らうことのない心なのである。（『教行信証』証卷）。

神が我々に対しても最も裨益を与えるよう欲する時に、我々は時として最も怒り狂うのである。実際、我々人間が本当に我々自身の福利を知り、最深の意味において本当に我々

自身の福利を欲するなら、この関係において柔軟であれという如何なる勧告も必要ではなかつたであろう。しかし我々人間は（誰がそのことを、自らの経験において確かめなかつたことがあろう！）、所詮神との関係において子供のようなものである (*child*)。

このことは又、使徒と凡人の違ひとしても説かれている。使徒にとつては、神の不变性の思想はただただ平安を伴うが、人間にとつては（思惑、思粹）存在にとつては）、憤怒の対象、躊躇の対象になるのである。自分に都合のよい不变性は賛同するが、そうでない場合は、貪・瞋・痴となるからである。

四 聖句に即して

キエルケゴールがこの書で引用している聖句はヤコブ書第一章、第一七節・二二節である。キエルケゴールの言葉でそれを引用しておこう。

凡ての善き賜物と凡ての全き賜物とは、上より、諸々の光の父より降るなり。父に於いてはいかなる変化も回転の影も無ざ者なり。父は、我々を父の被造物の初穂の如きもたらしめんとして、御旨のままに、真理の言葉によつて我々を生み給つたのである。それゆえに我が愛する兄弟達よ、いかなる人であつても聞くに速やかに、しかし語るに遅く、怒るに遅くあれ。何となれば人の怒りは、神の前に正義であるものを行なわなければならぬから。それ故凡ての汚れと凡ての惡意の残滓を捨て去り、柔軟に、あなたに植え

付けられ、又あなたの魂を祝福されたものたらしめる力をもつ御言葉を受け取りなさい。

」の引用を為した後で、キエルケゴールは「聞くに速やかに」「語るに遅く」「怒るに遅く」といふことを解釈している。そこでは snar-langsom ふうの言葉が対比されてくる。まず「聞くに速やかに」を考えてみよう。聞くとは、我々一人一人の内に植え込まれている（唯識で語る「依附」）御言葉を聞くのである。聞法といふことは親鸞にとって最も重要なことであるが、この「聞」に必要なことは、ただ一つ「柔軟」である」と、素直である」とである。私の言葉で語らうなら、思惑（思粹）を破つてとふう」とである（そしてこの「破つて」が生起する時には、聞く」と同時に、思惑（思粹）の根本である我意が自覚されているはずである）。その時には、直ちに御言葉は、我が身に届くのである。

次には「語るに遅く」と語られる。「なぜなら我々人間は、とりわけこれとの関連において、又とりわけ素早く為すおしゃべりといふものは、しづしづ善き又完全な賜物を、余り善くはなく完全でもない賜物にするのに役立つだけだからである」(ibid, S.256.) とキエルケゴールは述べている。私の言葉で言うなら、「聞」が一旦思惑（思粹）に取り込まれてから「語られる」なら、最早それは人間の思いに汚染されてしまつてしまおり、余程熟慮しない限り、柔軟な「聞」の瞬間（刹那）に到達しないからである。

又「怒るに遅く」と語られる。「我々は賜物が我々にとって善なるの完全なものに思われない時、怒るべきではない」とキエルケゴールは述べている。これも「我々にとって」が一枚噛んだ途端に、眞の賜物には出でえないと、そうだとすれば、偽りの賜物について怒るふう」とは、最早人間の責任であつて、徒に怒るなー とふう勧告が為されねばならないのである。」の聖

句を、仏教の立場から見れば、法に背反する時に生じる貪・瞋・痴の煩惱として解釈する」とも十分に可能である。

五 神の不变性に遭遇する時の二つの可能性——恐怖と解放

「」の作品は、大きく二つの部分に分かれている。それは第一二版ではコシツクとゲシュペルトで明記され、第二二版ではイタリックで明記されている。そしてその二部分が始まる直前に次のような文がある。

我々は次の二つを忘れないようにしよう。即ち使徒にどういふのであるか、「」とは、使徒が使徒であるということにその理由があるということ、又使徒は既に久しく無条件の恭順の内に神の不变性へ全く自己を委ねていたのだということ、又使徒は出发点に立っていたのではなく、むしろ道、狭いがしかし又善き道の終わりに立つていたのだと「」と、この道を使徒はあらゆる事を断念して選び、ますます強い歩調を以て永遠性に向かつて急ぎながら、後を顧みることなく不变にこの道に従つていたのだと「」こと、を。これに反して、我々は未だ初心者に過ぎず、訓育の下にある。我々においては神の不变性は又、別の側面から見られねばならない。そして我々がこの事を知れるなら、我々は使徒の崇高さを妄りに用ひる」との危険を容易に冒すのである (*Ibid.*, S. 257.)。

ここでは、非常に格調高くキエルケゴールは使徒の位置を讃嘆している。そして我々と使徒との質的な相違を述べている。我々は未だ初心者であり、未だ非自由であり、これから導き行かれる者である。これから一切を断念しなければならず、これから否定の道を辿らねばならないのである。このように述べて、次にキエルケゴールは、真理への道行きの手前に立つ人間の状況を次のように述べる。これはいわば善導大師の二河白道の直前に立つ旅人の状況と軌を一にしている。

かくして我々は、可能なら驚愕（恐怖）の内に、又安堵（安心）の内に、汝、不变者について、或いは汝の不变性について語ろうと思つ (*ibid.*, S. 258.)。

ここから可能なら二つの精神状態の内で、神と神の不变性について語るというのである。これは矛盾した状態である。一つは、神と神の不变性は我々を畏怖させるものである。しかし又同時に真に解放を与えるものなのである。ルドルフ・オットーのヌミノーゼの概念に通じる絶対者の属性がここで表現されているとも考えられる。又、畏怖と解放は順序から言えば、畏怖が先立つものであろう。真理に直面する者はまず驚愕するのである。それは余りにも世間常識とは質的にかけ離れたものだからである。しかし思惑（思忖）の内で、とまあまに展開する煩惱世界を真に解脱せるものも、この絶対的真理の他にはないのである。

六 畏怖の対象としての神の不变性

神は不变に自らの意志との意志疎通を、人間に要請されている。それは無常性を克服して永遠に目覚めよ、ということである。人間はこの世の可変性を嘆くのであるが、それでは真剣に神の不

変性を希求しているかといふと、そうではない。「君は漫然と日を送つていて、こんなことには思ひも及ばないのだろうか」と、キエルケゴールは日常性に埋没している普通人の「空過」（『淨土論』⁽³⁾）の有り様を厳しく問うただす。日常の在り方がどんなに悲惨な在り方であるかは、日常性からは分からぬ。しかし、遅かれ早かれ（tidligt eller sildigt）人間は神の不变性に遭遇し、これまでの悲惨を回顧せざるを得ないのである。

遅かれ早かれ、いつかはこの不变の意志と衝突しなければならない。この不变の意志は、君の福利を欲したが故に、君がこれを熟慮すべきことを欲したのであり、この不变の意志は、もし君が別の仕方でそれに衝突するならば、君を打ち碎くに違ひない。⁽⁴⁾

さて次の段階であるが、ともかく神と意志疎通してくる君、君は又神と良好に付き合っているのなら、君の意志は君の意志でありながら、又無条件に（絶対に）神の意志なのである。君の諸々の願い、君の一つ一つの願いが彼の命令であり、君の諸々の思い、最初にして最後の思いが神の思いなのである。さもなければ、神が不变であり、永遠に不变であるといふことは恐るべれども、（ibid.）。

道元の「自」の概念は、周知のように「仏道とは自」をならうなり。自」をならうというは自」をわするなり。自」をわすると「うは万法に証せらるるなり」（現成公案⁽⁵⁾）という言葉によく表現されているが、このキエルケゴールの文章と通するものがある。自我が破れて、万法の意志が己の意志となるところに、眞の「自」が成立するのである。もし、そつした事態が起こらないなら、万法は、自我に衝突し、打ち碎くであろう。それは畏怖すべき対象となるであろう。しかし、

「次の段階」として、万法に証せらるるなら、自己の願い、自己の思いは万法と一つになるのである。このことは一見違つた宗派に見えようとも、親鸞の信心にも通じるものがある。本願・名号の呼び声が届く一刹那に、すなわち聞信の一念に、私の願いは仏の願いとなり、そこに願作仏心・度衆生心が成立するのである。

以上を一言で言えば、思惑（思忖）で生きる人間の在り方と神と意志疎通している人間の間には、その人間の生死を分けるような、その人間の存在を打ち碎くような質的な差異があるということである。このことをこの後すぐに、キエルケゴールは特に時間の地平から問題にしようとしている。
 ところで永遠の不变者、彼にとつては千年は一日の如しだ。ああ、これすら言い足りず、彼にとつては千年は一刹那のような (*som et Nu*) ものである。実際彼にとつて本来それは無かつたも同然である。——もし君が「汝為すべし」と彼が欲するのとは違つた道を、ほんのわずかでも行こうとするなら、それは恐るべきことなのだ！ 本当に、もし君の、又私の、又これら無数の人達の意志が神の意志と全く合致しない場合、即ちそれは外部のいわゆる現実世界の忙しさの中で最もうまくいっている場合でもあるのだが、神は本来何らの気付きの印も与えられない。或いはむしろ正直な者がいて——もしそのような者がいるとして！ ——彼がこの世界、聖書のいうように、悪の内に存するこの世界を観察する場合、神が何らの気付きの印も与えられないといふことに意氣消沈せざるを得ないであろう。事態はそのような具合なのだ。⁽⁶⁾

で、善惡を思うのであるが、神はそのことに全く無頓着である。いわゆる正義の人はがっかりするであろうとキエルケゴールは言つてゐる。

人間的現実の喧騒に全く神は無頓着（絶対的無関心）なのである。そしてそのことは恐ろしさを軽減するどころか、むしろその恐怖の有り様を一層深刻なものにするのである。強者が強情な者を打ち碎き、破滅させることが恐ろしいことではない。神が悔られず裁きの時期には破滅的に人類に臨むといふことも、最も恐ろしいことではない。そのようなことは人間的に言えることに過ぎない。永遠の不变な神の裁きとは、そつした地平を質的に超越してゐるのである。神は全く静かに見ているだけであり、悪が蔓延し善良な者まで暴力に訴えて善を為そうとするような事態があるも、ただただ静かにみているのである。このことこそ最も恐ろしいことなのである、とキエルケゴールは言う。ここには【カラマゾフの兄弟】におけるゾシマ長老の問題が提出されている。神の沈黙は絶対的な壁であつて、その壁にぶつかって人間の思惑（思粹）は粉碎される。ここには又、ヨブの絶望の問題も関連するであろう。人間有為の世界が、如何に華麗に展開しようとも、それは無為の世界とは無関係である。或いは無関係という形で恐ろしい関係を保つてゐるのである。道元は口管打坐ということを絶対的な行としたが、それは又「無為の妙術」と表現されている。有為による煩惱世界の恐ろしさを知つてゐる言葉である。

人間は、時間を自らの思惑（思粹）によつて意味付ける。しかし、時間は神が与えるものである。「彼は時間を与える」（*ibid.*, S. 261.）とキエルケゴールは表現している。人間的に意味付けされた時間のみで物事を量ることこそ、人間の軽率である。罪責と罰との関係も、人間は軽率に考える。その内正義の概念も変わるであろうと考え、時の経過の内に、忘却が起り、罰も忘れてしまう。

変化するのは人間の方であつて、その変化する意味付けによつて、永遠を忘れますます不遜になつていく。しかし、そのような意味付けとは全く違つた永遠の尺度をもつて神は、一切を静かに見てゐる。マクロからミクロまで。

彼は現に存すると共に永遠に不变であり (*baade er han til, og han er evig uforanderlig*)、そして彼の無限の偉大さは、まさしく彼が最も微細なゆゑ見て取り、最も微細なものすら覚えてゐるといふ偉大さだからである (*ibid.*, S. 261.)。

七人間の心——レギーネとの関係の清算

キエルケゴールは、この作品において、レギーネとの関係も総括している。少し長くなるが箇所を引用しよう。

人間と人間との関係において、しばしば変化することについて嘆かれる。ある者は他の者に向かつてお前は変わつたと嘆く。しかし、人間と人間との間に於いてすら、時としてある者の変わらないことが悩みの種になるようなことがある。恐らく一方が他の人間に自分自身について打ち明けたことがあるかも知れない。彼が述べたのは、少し子供じみた悪意のないものであつたかもしれない。しかし事情はもつと真剣なものであつたかもしれない。すなわち、愚かで軽薄な心が彼の熱狂（熱意）について、彼の感情の持続性（堅忍）について、この世における彼の意欲（意志）について、高い調子で語るように誘われたのである。相手は静かにそれを聞いた。彼は微笑すら

しなかつた、或いは彼が語るのを妨げなかつた。彼は相手に語らせ聞いた。彼は沈黙したが、ただ彼が約束したのは（それは要求されたことなのであるが）、語られたことを忘れないということだった。そのようにして時が過ぎていった。そして前者はこれら全てのこととすつと以前に忘れてしまつてゐた。これに反して後者はそれを忘れないなかつた。然り、もつと異常なことを考えて見よう。前者が雰囲気の瞬間において表明し、ああ、その後いわばみずから放棄してしまつた思いつきに、後者は攪乱され眞面目に努力を重ね、自分の生活をそれとの関係で築いていた、そういう場合のことを考えてみよう。その人の記憶は何ら変わることなく、あの瞬間の言葉の一語一語がもらさず留められていることをきわめて明らかに立証するものであつたが、そうした記憶の確かさのもつ重みはいかばかりであつたろう！（*ibid.*, S. 262f.）。

「……」で大谷長は「キエルケゴールのレギーネ・関係の一場面の余韻或いはカデンツア」と註を付けてゐる。ここで言われる「もつと異常な」とはどういうことであろうか。誰かがその場の気分で表明し、いわば相手に手渡した考えに、その相手側は自分自身もなげうつて動かされ、その考えに従つて自分の人生を形成することである。恐らくレギーネが一場の気分の中で言ったことを、終生忘れずに、その言葉、考えに従つて自分の人生を作り上げていつたキエルケゴール！そのような記憶の重みについてキエルケゴールはここで述べてゐるのである（あなたの父と神の名に賭けて私を捨てないでほしい！ という言葉を想起してもよいであろう）。

ああ、この人間の心よ、秘密に閉ざされたお前の匂いの内には、他のだれにも知られる」となしに——といつてもそれは最悪のことだとは言い切れないだろうが——、時

には当人にやえもまつたく知られる」となしに、隠しもつゝとができるような何かがあるといふのか！ほんの少しでも歳を取れば、たちまちにしてまるで墓場のようになつてしまふ、「人間の心よ！この墓地の中に眠り、忘却の内に眠るものは、誓約、志望、決意のもろもろであり、計画の全体及び断片であり、神はその何たるかを知つておられる——と、まさにそのように我々人間は語るのである。……神は君が忘れた最小のこととに至るまでそれを知つており、君は君の記憶に対しては変わつたことを知つており、それを彼は不变に知つてゐる。彼はそれが何か過ぎ去つたものであるかのようにそれを思い出しすらしない、否、彼はそれが今日であるかのようにそれを知つてゐる。彼はこれら願望、決定、決断（決心）の何かに関して、いわばそれについて彼に対する語られたのかどうかを知つて——そして彼は永遠に不变であつたとして永遠に不变である。ああ、もし他の人間の記憶が或る者に對して重荷になることがあるなら——そうだとして、しかしそれはそんなに充分に信頼すべきものではない、そして兎も角もそれは永遠に続くことは決して出来ない、私は所詮「」の他の者と彼の記憶から自由になる。だが、全智者、そして永遠に不变の記憶、それから君は免れはしない、永遠においては免れる「」は最も少ない。恐ろしいことだ——。（ibid. S. 263.）。

ここに我々は、キエルケゴールのレギーネに対する最終的な別離の言葉を聞く」とが出来よう。キエルケゴール・レギーネ関係においては、レギーネが言つたことをキエルケゴールが永く記憶して、その言葉が人生の歩みすら決定したこと言つてが出来る。それはレギーネに取つては、重荷となる。しかし、そつとした記憶の在り方において、やはりキエルケゴールが正確であつたかどうか

という問題は残るのである。しかし、このような人間の問題と神の記憶とはまったく質的に異なっている。それは唯識で言えば意識と阿頬耶識の違いである。神の不変性を前にしては、二人とも共にその思惑（思粹）存在を深く懺悔するより他はないのである。そしてそのことにおいて、まさに永遠の結び付きを受取り直すことも可能となるのである。

実際、永遠に変わらずして彼に対し全てのものは永遠に現前しているのである。永遠に同じように現前しているのである。否、永遠に不变的な彼にとつては全てが永遠に現在的であり、永遠にして現在的である。いかなる変転（回転）の影も、朝と夜の、青年時と老年、忘却と容赦（弁解）、のそれも彼を変転させない。否、彼にとつてはいかなる影もないのである。言われるようにもし我々が（たちまちにして消え去る）影であるなら、彼はその永遠の不变性において永遠の明らかさである。もし我々が急ぎ行く影なら——私の心（魂）よ、君によく気を付け給え（お前は十分警戒すべきである）、というのは、君が欲しようが欲しまいが、君は永遠へ、彼のもとへ急ぎ行くのである。それゆえに彼は清算をするのみならず、彼が清算なのである。我々人間は、清算のために恐らく長い時間がかかり、そして清算が出来上がるためには克服しがたい多量の詳細さが入るかのようにして清算しなければならない（清算が成就され得る前に、恐らく処理出来ぬ程多くの細やかな手続きがあるとかいうようにしてその清算を果たすに違いない）。ああ、我が魂よ、清算（清算）はあらゆる瞬間に実現されているのである。なぜなら彼の不变的な光明が清算であり、それはどんな些細なものの中にも（最小のものの中にも）完備されており、又それは、すでに私が忘れてしまったも

のも決して忘れず、実際にあつたことを違つて記憶する私の場合とは異なる永遠の不变者たる彼によつて保管されてゐるからであ（*ibid.*, S. 264.）。

八 平安と淨福の場所

「」の思想には又、平安と淨福があるところとも本當である。もし君が「」の人間世界の、あらゆる「」の時間的で現世的な可変性と交換に飽き、君自身の不安定さに飽きて、休みそして休み終えるために、君が君の疲れた頭、君の疲れた思い、君の疲れた心を休ませる得る場所を望む」とがあるなら、おお神の不变性の中に休息がある（*ibid.*）。

「」に第一のイタリック体がある（第二版）。「」で大きな分割があるのである。すなわち神の不变性は畏れとねののきの対象であると同時に、又真の安らぎが成就する所でもあるのである。キエルケゴールは「」で Sted (Place) と云ふ言葉を使つてゐる。眞実の場所、人間が眞実そこに休息を実現できる場所とは何處であるのか。それは神の不变性の思想の内にあるのである。

しかしながら、「」の思想を真に受け入れるには、我意の否定が必要である。「」で「」の小論も最初の問題に戻るのである。神の不变性の受容と我意の否定（金子大栄は「念仏は自我崩壊の呼び声である」といられた）は同時に起つるのである。又我意の否定は我意の自覺を通して以外にはありえない。親鸞の「」、「種深信」の構造がはつきりと見て取れるであろう。「罪惡深重・煩惱熾盛」の自覺こそが眞の平安への飛躍を可能にするのである。平安と淨福の場所へ至る「」は、かくして非常に弁証法的である。

またキエルケゴールは興味深いことをここで述べている。それは神の不变性の思想によつて安らぎの場所に住まうには、常に神の不变性を思い念じなければならないというのである。一旦神との関係が（神との意志疎通が）生起して、それでおしまいという訳ではないのである。人間存在は常に思惑（思忖）存在である。それはこの心身のある間は持続するものである。私は他力信仰の現実性の特徴を常々 *schon+noch nicht* 「既に」と「未だ……ない」との相即で考へてきた。ここから、「常に思う」ことの重要性が生じるのである。」のことは浄土教では「執持すること」の重要さとして考へられている。執持とは「とりたまつ。常に堅く念頭に把握して忘れざること」をいう。小経（阿弥陀經）の「執持名号」或いは覺如の「執持抄」等、」のようなどころから出てくる言葉である。

さらにこの思想が憩いの場となることを、次のように述べてゐる。

幸福な住居を持つてゐる者（見張る者）は言う、私の住居は永遠に保護されてゐる、私は神と神の不变性の中に憩う、と。その憩いを、君自身以外の誰も君に妨げない。もし君が不变の服従の中で全く服従するようになり得るなら、君はどの瞬間にも、重い物体が地上に降下するのと同じ必然性で、或いは軽い物が天に向かつて昇るのと同じ必然性で、自由に神の内に憩うだらう。さらに付け加えるならば、一切をただそれが為すに任せて回転させなさい。（そしてその他に關しては、全てのものが、それがなすように変換せしめればよい）（ibid., S. 265.）。

「ハーディング」の言葉について触れておきたい。(1)まずキエルケゴールが「幸福な住居」といつて「heim」である。Heim (Heimat) の概念は、恐らく「如来の家」の概念とも通じるであろう。或いはこやせか異質な改変を為した形で、ハイデガーの Heimat にも通じるであろう。(2)又、Fri という言葉がここに出てくる。わずか一語ではあるが、キエルケゴールの自由概念の成立する場を表現して余りあるのではなかろうか。それは神の不变性に不变に服従するところに成就するのであり、しかもその際には自我が崩壊していかなければならない。又(3)「一切をただそれが為すに任せて回転せなさい」という言葉がある。「」は非常に重要な箇所である。一切が成るようになる縁起の世界と通じる。英訳では "Then let everything else change, as it does" となっている。諸行無常そのものに成り切るところに（それは徹底した我意の否定を当然伴う）、諸行無常に振り回されない平安な境地が（場所が）現成するのである。

さて、最後にキエルケゴールはこの平安と淨福の場所、憩いの家について、さらに「泉」の比喩をもつて記しているので、それを見ておきたい。

聴衆者諸君！ 今こうしている間にも、時間はみるみる過ぎていく。そしてこの談話も又そ�である。もし君自身に求めるところがないなら、やがてこのひと時も又忘れ去られるであろう。談話も又そ�である。そして君自身に求めるところがないなら、やがて神の不变性の思想も又可変性の内に忘れ去られるであろう。しかしながら、それについて神には、そう不变者である彼には何の責めもない！ しかるにもし君が忘却という罪を犯すことになれば、この思想の中で君は生涯に渡つて、否永遠に十分庇護されるであろう。砂漠（荒野）の中での一人の孤独な者を考えて見たまえ。太陽の熱

で殆ど焼き尽くされ、衰弱しつつ彼は泉を見出す。ああ、何たる快い涼味（涼感）だろう！（*jigoku*）。

こうしてキエルケゴールは泉の発見を不変なる神の発見に譬えている。そこには偽りのない、眞実の涼感がある。親鸞の淨土にも泉の意義があつて、悲願はたとえば「涌泉（ゆせん）のごとし」（教行信証）と言わわれているのが想起される。「ここに現生不退、正定聚の立場が成立するのである。キエルケゴールにおいても最初の神との出会い（回心）がここに考えられている。さて、次にこの涼味の受取り直しについてであるが、次のように述べられている。少し長くなるが、最後に引用しておこう。受取り直しは「一人の人間の胸の内に」実現するのであって、それがここでしつかりと確認されている。

彼の人生は、彼が考えていたとは全く別の展開をした。彼はある時正道を踏み外して、広い世界へ引き裂き込まれた。多くの年月の後で彼は帰ってきた。その時最初に彼の頭をよぎったのは泉であつた——しかしそれは無かつた。それは涸渴していた。一瞬間、彼は悲しみの内に沈黙して立っていた。次いで彼は気を取り直し、そして言つた。本当に私は君の讃美のために言つた一言もやはり撤回しない。それは真実であつたし、全てだ。そして君が存していた間に君の美味しい涼味を讃美したのだ。ああ、愛すべき泉よ、今君は消え去つたが、一人の人間の胸の内には不变性があるということが真実であることを示すために、私にお前を讃美させて欲しい。……しかしあなた、おお神よ、あなた不変なる者、あなたは常に不变に見出されます。そして常に不变に見出さ

注

れます。何人も、生においても死においても、あなたが見出されずあなたが存しない程遠く旅する者はありません。あなたは実際至る所にあられます。——地上の泉はそのようには存しません。泉はただ個々の場所にのみ存します。さらに——無限に確かな」と! ——あなたは言うまでもなく泉のように一箇所には止まっておられません。あなたは一緒に旅をされるのです。ああ、そして誰もあなたへ帰路を見出す」とが出来ない程遠くへ正道を踏み外す者はありません (*ibid.*, S. 266).⁽⁷⁾

(やましたひでゆき)

- (1) S. Kierkegaard: *Guds Uforanderlighed*, S. V. 3 udg. Bd. 19, Gyldendal, 1964, S. 256. なおキルケゴー
ルの「キリストは【全集第11版】を用い、而用は括弧内に巻数と頁数を示した。
- (2) 思惑といふ言葉は括弧付けて、思惑と記してあるが、これは、拙著【宗教的実存の展開】創言
社、一九〇〇年、六頁以下を参照。
- (3) 【真宗聖教全書】一、大八木興文堂、一九六七年、一七〇頁参照。
- (4) S. Kierkegaard: *Guds Uforanderlighed*, Bd. 19, S. 259.
- (5) 道元【正法眼藏】水野弥穂子校注、岩波文庫、一九三三一年、五四頁。
- (6) S. Kierkegaard: *Guds Uforanderlighed*, Bd. 19, S. 260.
- (7) 本論文は、一九〇〇年秋のキルケゴール協会講演会での話が元となつてゐる。